

## 没 (mei) について (三説)

中村雅之

### 1. はじめに

中村 (2004a, 2004b) において「没 mei」の発音の生成過程について論じたが、そこに紹介した先行研究の中に漏れがあった。すなわち、Demiéville(1950)と平山久雄(1996)である。前者のドミエヴィル氏の論考は、少なくとも「没 mei」に関する限り、さほど取るべき点があるとは思われないが、それに対する論評である後者には、いくつか重要な指摘がなされている。本稿ではそれらを補った上で、これまでに述べたところを総括しておきたい。

### 2. ドミエヴィル氏の古音保存説

ドミエヴィル氏 (以下 D. 氏) は、文法化した常用語の中に少なからず古代性をふくむ発音が保存されていると考え、「没 mei」もその一例とした。いま平山 (1996) によって、D. 氏の古音保存説のうち「没」に関わる部分を引用する。

現代北京語の否定詞「没」或いは「没有」は、用法上、確定 (determiné) の否定、及び存在の否定 (privatif) に分けられる。確定の否定即ち “...しなかった” “...していない” の場合は「未」に相当する。「未」の文語音 uei は音韻変化規則に従い、\*\*mǐwəd > mwei > uei と変化したものであるが、口語においては \*m- が保存されて mei となり、「没」の字を充てられた。「有」が付いた mei-iou の形は、存在否定への類推かも知れないが即断できない。いずれにせよ、語頭の m- が古音保存であることに問題はない。

存在の否定即ち “...がない” の場合は「無」に相当する。「無」の文語音 u は、音韻変化の規則に従い、\*\*mǐwo > \*miu > u と変化した結果であるが、口語においては、恐らく、\*mi(o)u の二重母音を保存するため m- と -i(o)u の間に母音 ei が挿入されて mei-iou となったものであろう。結果的には \*m- もまた保存されたのである。

まず前半部分についてであるが、この説は論理的に成立し得ない。なぜなら「未」の口語音として「mei」が仮に存在したとしても、それに「没」の字を充てる理由がないからである。「mei」に「没」の字を充てるためには、「没」がその段階ですでに「mei」の音を持っていなければならない。我々の関心事は、「没」が 19 世紀の中頃から後半にかけて、いかにして「mei」の音を獲得したかということにあるのであって、あたかも「mei」が「没」の由来の古い字音であるかのように見なす D. 氏の立論は、残念ながら全く説得力を持たないのである。

後半部分の「存在の否定」については、「無」との関連はともかくとして、母音 ei が挿入されたという部分は、あまりにも唐突かつ不可解な想定と言わざるをえない。

### 3. 平山氏の論評

平山 (1996) は Demiéville (1950) に対する論評であるが、その「没」「没有」に関する部分には次のようにある。

D. 氏のいう “確定の否定” と “存在の否定” とは、北京では同じ méi 或いは méiyǒu

であるが、『昌黎方言志』(上海教育出版社、1960年。1984年新1版)によると(新1版 23-25頁)、河北省の昌黎方言では、動詞に関して“確定の否定”を表わす場合には  $mei^{\text{去}}$ 、 $mei^{\text{去}} iou$  に、名詞に関して“存在の否定”を表わす場合には  $mei^{\text{陽平}}$ 、 $mei^{\text{陽平}} iou$  に発音される。 $mei^{\text{去}}$ 、 $mei^{\text{去}} iou$  における  $mei^{\text{去}}$  は“未”  $*mi\check{e}i^{\text{去}}$  に、 $mei^{\text{陽平}}$ 、 $mei^{\text{陽平}} iou$  における  $mei^{\text{陽平}}$  は「無」  $*miu^{\text{平}}$  に由来するであろう。北京では音形の類似に引かれて  $m\grave{e}i$  (去声) が  $m\acute{e}i$  (陽平声) に同音化したと見られる。ところで「未」「無」は音韻変化規則によれば、現にそれらの字音がそうであるように、 $w\grave{e}i$ 、 $w\acute{u}$  であるべきところ、それが例外的に鼻音声母  $*m-$  を保っているのは、“軽読”の結果として介音  $i$  が脱落したために、 $*m-$  が唇歯音  $*\eta(>*u->w-)$  に変化する“軽唇音化”の条件を欠いた故と説明できる。「無」が  $m\acute{u}$  でなく、 $m\acute{e}i$  であるのは、後接する「有」の含む  $i$  の同化によるもので、「没有」は即ち「無有」であり、「没」は即ち「無有」から「有」が脱落した形式と理解される。

以上の説明は、「未」に関してはすでに述べたように認められないものの、大いに示唆に富むものである。とりわけ「無」の口語音が軽読の結果として介音  $i$  を失い、軽唇音化しなかったというのは説得力がある。この見解を取るならば、「没  $mei$ 」がなぜ2声なのかという問題もその解決の糸口が見つかったことになる。すなわち、「没」の字音が4声(去声)であるにも関わらず、「没有」の縮約ないし同化によって生じた「 $mei$ 」が2声であるのは、実は「 $mei$ 」になる以前、「 $mu$ 」の段階ですでに2声(陽平声)であったと考えることができる。

#### 4. “確定の否定”と声調の問題

元明清の口語資料における“存在の否定”と“確定の否定”は、『老乞大』とその改訂本などを基にごく大雑把にまとめれば、以下のような状況にある。

|       | 元      | 明      | 清      |
|-------|--------|--------|--------|
| 存在の否定 | 「無(有)」 | 「没(有)」 | 「没(有)」 |
| 確定の否定 | 「不曾」   | 「不曾」   | 「没(有)」 |

これによって、存在の否定が「無」から「没」に置き換えられたこと、そして確定の否定は存在の否定への類推によって広まったらしいことが見て取れよう。

平山氏が想定したように、「無」の口語音が「 $mu$ 」であったとすれば、その声調は「無」の字音と同じく陽平声(普通話の2声)であったと考えてよい。では、昌黎方言において確定の否定が去声の「 $mei$ 」であるのはなぜか。平山氏は D.氏と同様に「未」の口語音と考えたが、それが正しくないことはすでに述べたとおりである。昌黎方言における去声の「 $mei$ 」は、おそらく「没」の字音「 $mu$ 」が去声であることに影響をうけたものであろう。明代に存在の否定が「没」の字をもって記された時から、「没」には「 $mu^{\text{陽平}}$ 」と「 $mu^{\text{去}}$ 」の2種の読みが生まれた。そのため、確定の否定を存在の否定への類推によって「没」としながらも、方言によって、そのまま陽平で受け入れるものと、字音によって去声で受け入れるものとがあったのだと考えられる。

#### 5. 南京音との関連

「無」の口語音としての「 $mu$ 」はどこで生まれたのか。それは南京ではなかったかと

私は考える。元代には北方口語では存在の否定は「u (= wu)」と発音され、「無」と表記された。字音と同じであるからこれには特に問題はない。一方、南京の口語では存在の否定は「mu」であったが、文字としては表記されなかった。明代に入り、都が南京に移ると、官話の拡大とともに「mu」が広まり、「没」の字を充てられることになった。やがて確定の否定においても、存在の否定への類推が働いて、「没 mu」が用いられるようになったが、その際、存在の否定と同様に陽平声で発音する方言と、「没」の字音と同様に去声で発音する方言とに分かれた。以上が私の想像である。

もしも北方において「無」の口語音が「mu」であったとすれば、そもそも「没」に書き換えられる理由はなかったはずである。元代に「無」と表記されていた存在の否定がもしも当時の口語で「mu」と発音されていたのであれば、そのまま「mu」を「無」と表記し続けたとしても何の支障もないのである。明代に入って、それまでと異なる音形が広まったからこそ新たな表記が求められたのであろう。「無」を「u (= wu)」と発音することに慣れている者にとっては、「mu」を「無」で表記することに抵抗があった。そのため、当て字として「mu」に近い音を持つ「没」が選ばれた。当時の南京では「没」の字音はおそらく「mu<sup>2</sup>」であったが、字義にいくぶん通じる点があることから「没」が選ばれたのであろう。

## 6. まとめ

ここまで述べたところを前稿および前前稿の記述と合わせてまとめておく。(以下のうち は今のところ仮説にとどまる)

“...がない”は元代においては「無(有)」であり、その発音は「u (iu)」であった。明代に入ると、それ以前には南京に限られていた「mu (iu)」が共通語として広まり、その音「mu」を表わす字として「没」が選ばれた。「mu」は南京における「無」の口語音で声調は「無」の字音と同じく陽平声であった。

明末以降、“...しなかった”“...していない”を表わす語が「不曾」から「没(有)」に置き換わった。これには“...がない”の「没(有)」への類推が働いたと考えられる。その際、声調は方言によって、“...がない”の「mu」と同じく陽平声になるものと、「没」の北方における字音と同じく去声になるものとに分かれた。

19世紀中頃になると「没有 mu iu」において、徐々に「i」への同化が生じ、「mei (iu)」という発音が生まれた。それ以前の満洲文字資料では「没」はほぼ常に「mu」(まれに mo)と表記されている。19世紀後半のWadeの『清語階梯語言自邇集』において「mei」は「mo iu」の「corruption」とであると観察されている。また同時期と思われる『你呢貴姓』のハングル表記に「mui 'iu」が見える。

Demiéville (1950) "Archaïsmes de prononciation en chinois vulgaire" *T'oung Pao* XL-1-3

中村雅之 (2004a) 「没(meい)の成立について」『KOTONOH』15号

中村雅之 (2004b) 「没(meい)について (補説)」『KOTONOH』17号

平山久雄 (1996) 「ドミエヴィル氏の「白話語彙における古音の保存」説について」『中国文学研究』